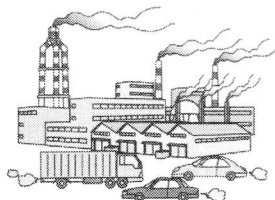


近郊農村地域 から都市化へ



農業から工業地域

戦前までの吉祥院地域（旧吉祥院村は昭和11年に京都市下京区に編入される）は、就業者の8割が農業に従事していました。

農村的景観は、第二次世界大戦後まで維持し、点在する農家と竹藪、かまぼこやちくわを作る零細な工場が立ち並ぶ郊外でした。

近郊農村型地域から都市化へ

昭和初期頃までは、吉祥院地域は近郊農村型地域で、1960年（昭和35年）代以降、急速な都市化・工業化が進み、それに伴って住民の経済活動及び六斎保存活動も必然的に変化して行きます。

近郊農村型地域から第2次、第3次産業へと都市化へと移り変わって行きます。

青年会への強制的参加と実力主義

地域住民の多くは農業に従事していたため、地域活動として重要な位置を占めていた青年会への参加は必要不可欠でした。

この青年会に参加しない場合は、一人前の男としてみなされないほか、農業への水路など、地域共有財の使用が困難となるなどの不都合があるため、15歳になると青年会への参加は必然的でした。同時に、共親会（現吉祥院六斎保存会）への強制的な入会があり、六



西大路九条と十条間（写真：イオン洛南店前）

斎に関わるようになります。

吉祥院天満宮への六斎奉納に出られるようになるまで、約2～3年の間は、「茶番」と呼ばれる雑用係、下働きを経験しながら六斎の稽古をしていました。得意、不得意に応じて太鼓・笛・芸物など、上演の際に役割を与えられていました。青年会や共親会への強制的な参加と実力主義が、この時期における六斎保存会への参加者の大半の意識でした。

強制的参加から自由参加

近郊農村型地域から都市化に伴い、それまで農業に従事していた地域住民は、第2次産業、第3次産業へと移ったために、六斎に参加することに対する強制力が著しく希薄化します。

六斎保存会の最盛期は、1960年（昭和35年）代頃で、当時、円山野外音楽堂で市内10数組の六斎組が集まり、「京都六斎コンクール」が開催され、3年連続の優勝を果すほどで、1980年代では、日本武道館や国立劇場などの地方公演や博覧会、テレビ出演の回数も増え、保存会には約40名の会員が所属していました。

しかし、稽古や地方公演、テレビ出演するには、時間の融通が利く職業でなければならぬが、この時期、都市化に伴って、住民の就業形態も変化し、保存会への参加者の減少と高齢化になり、そして衰退期へとつながって行きます。